福島県文化財調査報告書第556集

小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告

添野町大町遺跡

２０２２年

福島県教育委員会
公益財団法人 福島県文化振興財団
福島県土木部

小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告

添野町大町遺跡

序　　文

「ふくしま復興再生道路」は、東日本大震災からの被災地の復興と住民の帰還を加速させるため、避難指示区域やその周辺における広域的な物流、地域医療及び産業再生を支える幹線道路として整備が進められております。その中でも小名浜道路(主要地方道いわき上三坂小野線)は、小名浜港と常磐自動車道を自動車専用道路で結ぶことで、県の沿岸部と内陸部との物流ネットワークを強化し、小名浜港とその周辺地域の産業と観光の拠点化を図るものであります。

福島県教育委員会では、同事業計画地内に所在する添野町大町遺跡について、埋蔵文化財の保存のための協議を行いましたが、現状での保存が困難であったため、記録保存のための発掘調査を実施することといたしました。

本報告書は、令和４年度に実施した、添野町大町遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。発掘調査の結果、中世頃と推測される遺構・遺物が確認されました。添野町大町遺跡の周辺には中世の城館跡が多数分布していることから、本遺跡もそれに関連するものと考えられます。

この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成に当たり、御理解と御協力を頂いた福島県いわき建設事務所、いわき市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和４年11月

福島県教育委員会
教育長　大　沼　博　文

あ い さ つ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しています。特に、震災以降は浜通り地方において復興関連の調査を多く行ってきました。

本報告書は、令和４年度小名浜道路整備事業遺跡発掘調査における添野町大町遺跡の調査成果をまとめたものです。現在、いわき市で建設工事が進められている小名浜道路は、重要港湾の小名浜港と常磐自動車道を東西に結ぶ自動車専用道路で、「ふくしま復興再生道路」の一つに位置づけられています。

添野町大町遺跡は、小名浜道路建設予定地のほぼ中央に位置する中世の集落跡で、遺跡の北隣を「旧陸前浜街道」（主要地方道常磐勿来線）が通過しています。また、添野町大町遺跡の周辺には、中世の城館跡が多数分布しています。これらのことから、添野町大町遺跡の集落は、中世の城館が取り巻く要衝の一角で営まれていたものと考えられます。

郷土の歴史研究の基礎資料として、さらにはふるさとの文化を理解するための資料として、生涯学習の場などで本報告書を広く活用していただければ幸いです。

終わりに、今回の発掘調査に御協力いただきました関係諸機関並びに地域住民の皆様に厚くお礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和４年11月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　鈴　木　淳　一

緒　　言

1　本書は、令和４年度に実施した小名浜道路整備事業関連遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。
　添野町大町遺跡　　福島県いわき市添野町大町　　遺跡番号：0720401485

3　本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し、調査に係る費用は福島県土木部が負担した。

4　福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置した。
　副主幹　香川　愼一

6　本書の執筆は、香川が行った。

7　本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の５万分の１地形図、並びに福島県土木部作成の工事計画図を複製したものである。

8　引用・参考文献は、執筆者の敬称を略して掲載した。

9　本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言をいただいた。
　いわき市教育委員会　　公益財団法人いわき市教育文化事業団

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　　表記がない遺構図は、すべて図の真上を座標北とした。

(2) 縮　　尺　　各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。

(3) 標　　高　　断面図及び地形図における標高は、海抜標高を示す。

(4) 座　　標　　平面図における座標は、国土座標第Ⅸ系の数値を示している。

(5) 土　　層　　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。

(6) ケ　　バ　　遺構内の傾斜部は「 ⊓⊓ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 ⊤ 」、後世の撹乱部や人為的な削土部は「 ⊤ 」の記号で表現した。

(7) 網　点　等　　網点等は各挿図中に用例を示した。

(8) 遺 構 番 号　　当該遺構は正式名称で記載した。

(9) 土　　色　　土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。

(2) 番　　号　　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし､写真図版中では「１－１」と示した。

3　本文中及び遺物整理に使用した略記号は、以下のとおりである。

いわき市…ＩＷＫ　　添野町大町遺跡…ＳＯ

溝　跡…ＳＤ　　土　坑…ＳＫ　　小　穴…Ｐ

グリッド…Ｇ　　遺構外堆積土…Ｌ　　遺構内堆積土…ℓ

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　遺跡の位置と地理的環境……2
第３節　歴 史 的 環 境……4
第４節　調 査 経 過……6
第５節　調 査 方 法……7

第２章　調 査 成 果

第１節　遺 構 の 分 布……9
第２節　基 本 土 層……9
第３節　溝　　跡……10
　１号溝跡(10)　　２号溝跡(10)　　３号溝跡(10)
第４節　その他の遺構……12
　１号土坑(12)　　２号土坑(12)　　小穴(12)

第３章　ま　と　め……14

挿図・表目次

［挿図］

図１　小名浜道路の位置……1
図２　工事計画と遺跡……2
図３　遺跡周辺の地形……3
図４　周辺の遺跡……4
図５　遺構配置……8
図６　基本土層……9
図７　１～３号溝跡・出土遺物……11
図８　１号・２号土坑……12
図９　小穴……13
図10　かわらけ……14

［ 表 ］

表１　周辺の遺跡一覧……5
表２　小穴一覧……13

写真図版目次

１　調査区全景(南から)……17
２　調査区東部(南東から)……17
３　調査区東部(北西から)……18
４　作業風景(南西から)……18
５　基本土層断面(南から)……19
６　１号溝跡全景(北東から)……19
７　１号溝跡断面(西から)……19
８　１号・３号溝跡断面(南から)……19

9　２号溝跡全景（南から）……20
10　３号溝跡全景（北西から）……20
11　２号溝跡断面（南から）……21
12　３号溝跡断面（南から）……21
13　１号土坑全景（北から）……21
14　１号土坑断面（北から）……21
15　Ｐ２断面（南から）……21
16　Ｐ４断面（南から）……21
17　Ｐ７断面（南から）……21
18　Ｐ９断面（南から）……21
19　Ｐ12断面（南から）……22
20　Ｐ13断面（西から）……22
21　Ｐ14断面（西から）……22
22　Ｐ15断面（西から）……22
23　出土遺物……22

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

現在、福島県いわき市の南東部において建設工事が進められている小名浜道路は、起点の泉町下川と終点の山田町塙を概ね東西に結ぶ総延長約8.3㎞の自動車専用道路で、福島県が策定した「ふくしま復興再生道路（８路線29工区）」の一つに位置づけられている。

ふくしま復興再生道路は、原子力災害からの復興に向けた戦略的な道路整備事業であり、その一端をなす小名浜道路は、小名浜港を中心とする広域物流ネットワークを強化することにより避難地域の復興等を支援していくものである。

福島県教育委員会は、小名浜道路関連の貯水池建設予定地において、地形的に埋蔵文化財包蔵地の可能性がある箇所を確認したことから、令和３年度に公益財団法人福島県文化振興財団に委託して試掘・確認調査を実施した（2022『福島県内遺跡分布調査報告29』福島県教育委員会）。調査の結果、中世の可能性が考えられる埋蔵文化財が発見・確認され、名称を添野町大町遺跡として『福島県埋蔵文化財包蔵地台帳』に登録された。また、添野町大町遺跡と貯水池建設予定地が重複する350㎡の範囲について、保存が必要とされた。

保存協議の結果、添野町大町遺跡350㎡の箇所については記録保存のための発掘調査を行うことが決定され、福島県教育委員会は、同調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施することとした。公益財団法人福島県文化振興財団は、令和４年４月１日付け福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員１名を配置して添野町大町遺跡の発掘調査を実施した。

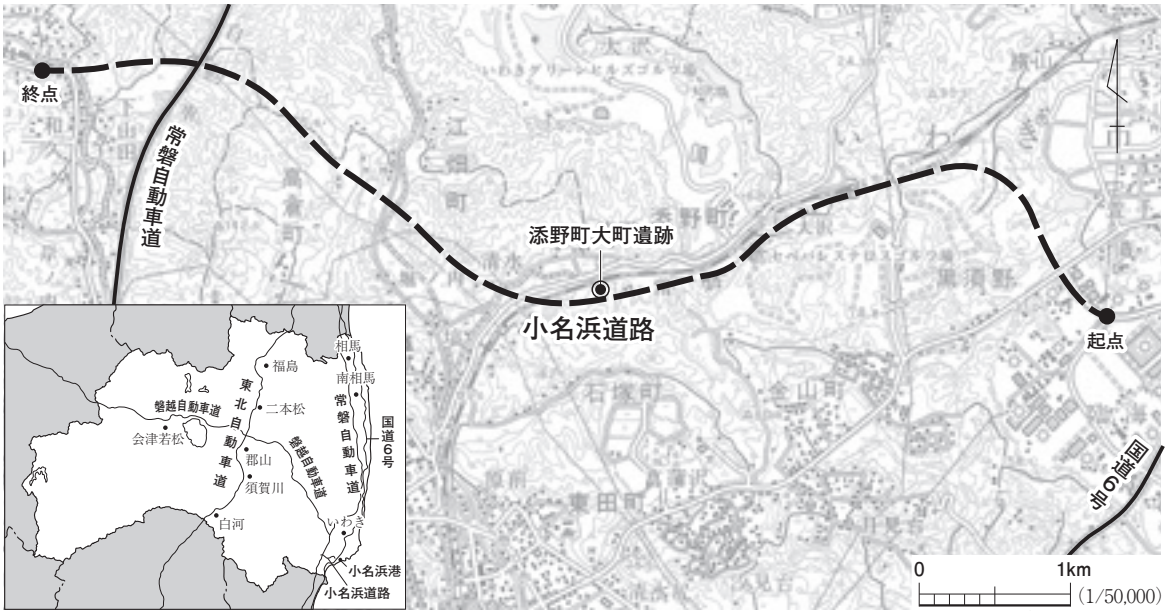


図１　小名浜道路の位置

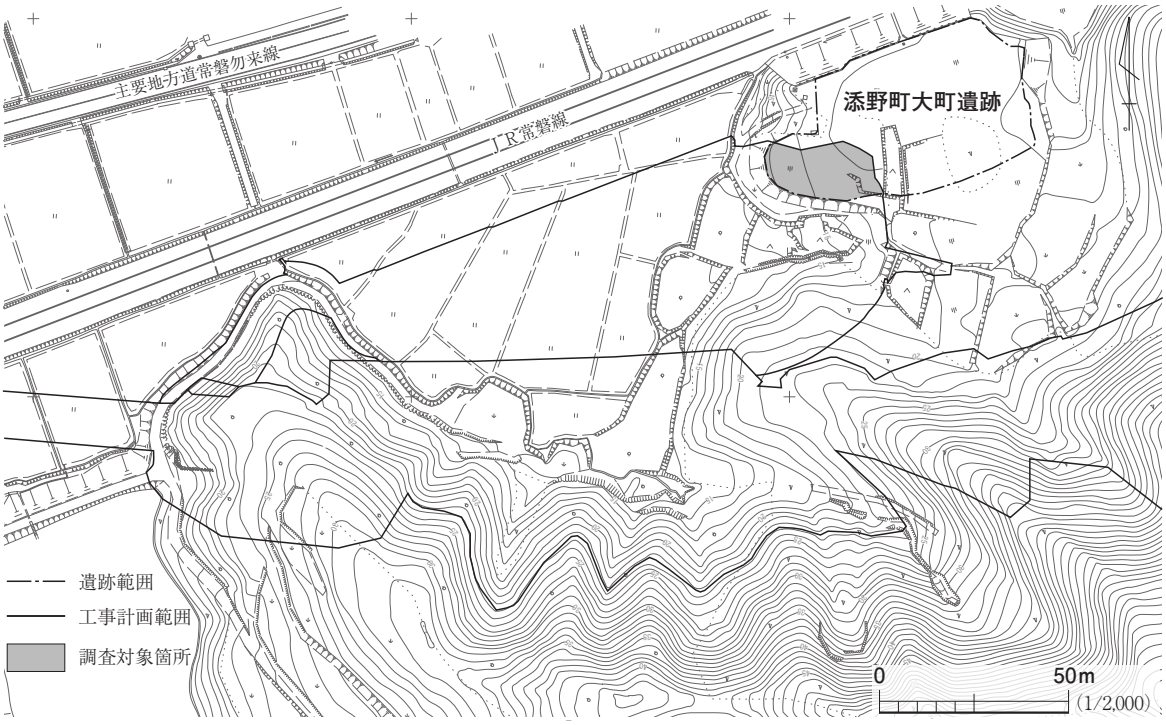


図２　工事計画と遺跡

第２節　遺跡の位置と地理的環境

添野町大町遺跡は、いわき市添野町大町に所在する。ＪＲ常磐線植田駅を起点とすると、遺跡の位置は、駅の北北東約2.1㎞の地点である。いわき市の行政区画で見ると、遺跡の位置は、同市最南端の勿来地区東部にあたる。

いわき市は、福島県の太平洋沿岸地域を指す浜通り地方の南部に位置し、その南辺は茨城県と接している。いわき市の面積は約1,230㎢と非常に広大で、また人口も福島県で最も多い中核市である。添野町大町遺跡の東約７㎞の地点には、福島県最大の物流・工業港の小名浜港がある。

いわき市沿岸部の気候は、気温の年較差が小さい海洋性であり、福島県中部・西部の中通り地方・会津地方と比較すると、夏は涼しく、冬は雪が少ない。

いわき市の主要河川には、平地区の中心部を流れる夏井川、小名浜港に注ぐ藤原川、勿来地区を流れる鮫川があり、添野町大町遺跡の一帯は鮫川水系に属している。鮫川は、中通り地方の鮫川村松曾根山を水源とし、古殿町を経ていわき市に至る二級河川である。

浜通り地方の地形の大きな特徴としては、西半の阿武隈高地と東半の低地帯に明瞭に区分されるという西高東低の地勢があげられるが、いわき市においても同様である。阿武隈高地は、福島県東部を南北に縦貫する隆起準平原性の山稜で、東西の分水界及び中通り地方との境界である。

一方、浜通り地方の低地帯は、丘陵部・台地部・低地部に細分され、概ね東流する各主要河川の作用によって河岸段丘地形等が形成されている。丘陵部は、阿武隈高地の東縁から連続する定高性

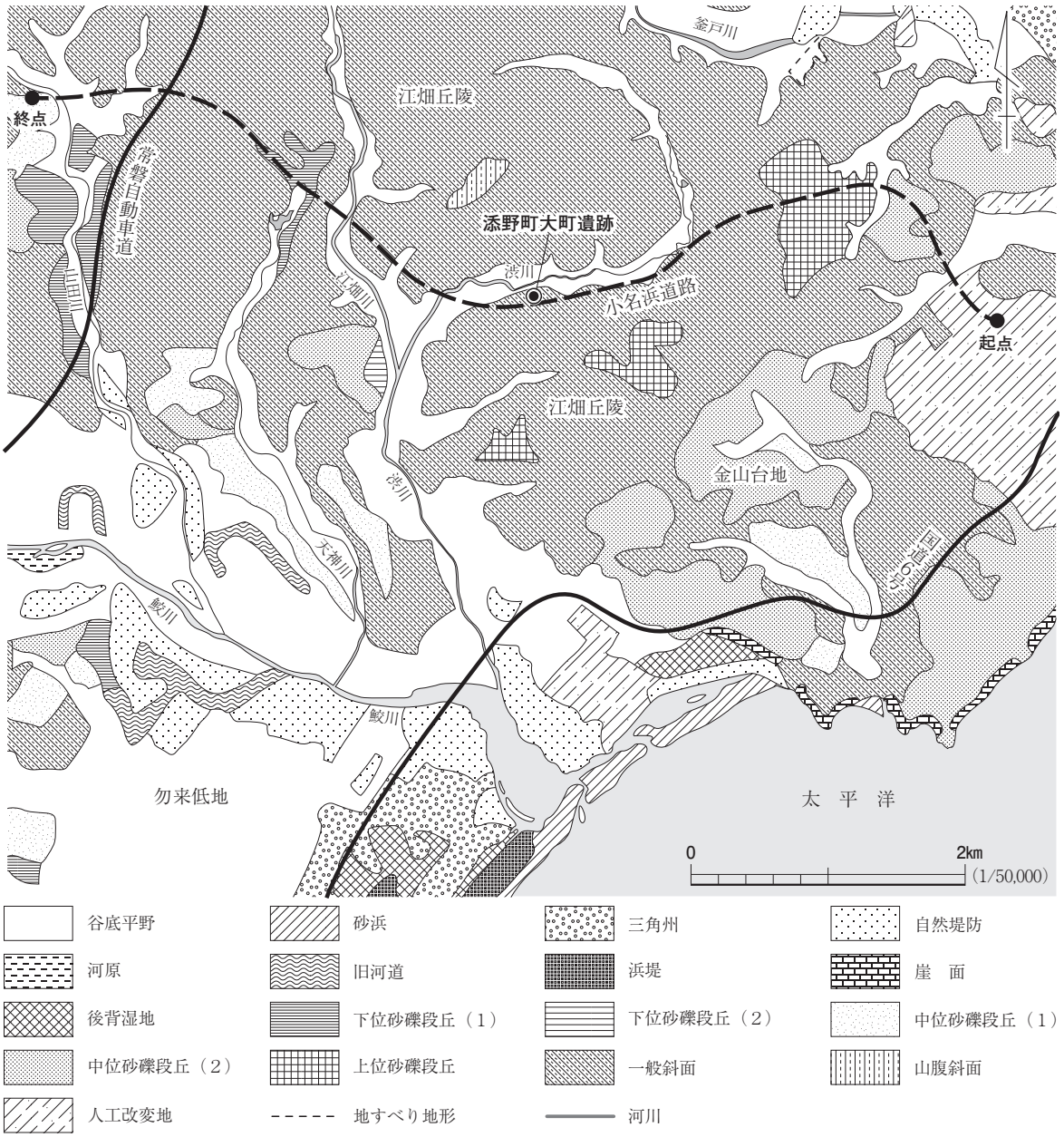


図３　遺跡周辺の地形

の支脈丘陵が主であり、上位段丘面が開析された姿とされる。添野町大町遺跡が所在する勿来地区東部では、鮫川下流の北側に江畑丘陵が広がり、その丘陵頂部には上位段丘面が部分的に残存している。江畑丘陵の所々を、渋川・江畑川等の鮫川支流が小河谷を刻んでいる。

台地部は概ね中位段丘域が該当し、勿来地区東部では、江畑丘陵から南東方向に金山台地が連続している。金山台地の東端は、小名浜湾と接している。

低地部は、谷底平野・下位段丘域が該当する。勿来地区では、鮫川沿いの勿来低地が知られる。勿来低地は、鮫川の河口付近で三角州が認められるものの、やや内陸に入ると自然堤防の発達が顕著であり氾濫原的な性格が強い低地である。

添野町大町遺跡は、江畑丘陵の地形区に属し、標高約20ｍの丘陵突端部に立地している。添野

町大町遺跡の北側には、渋川によって開析された標高約11ｍの狭長な谷底平野が東西に延びており、ＪＲ常磐線及び主要地方道常磐勿来線(旧陸前浜街道)が通じている。

第3節　歴 史 的 環 境

添野町大町遺跡が所在する勿来地区東部の地形は、およそ江畑丘陵、金山台地、鮫川水系に区分されるが、時代により遺跡の立地傾向も異なる。

勿来地区東部における旧石器時代の遺跡は、金山台地東端の輪山遺跡(61)が知られており、玉髄製の横長剥片を素材とするナイフ形石器が出土している。

次の縄文時代であるが、湾岸地形が発達するいわき市は、浜通り地方の中でも貝塚が集中する地域として知られている。小名浜湾を望む金山台地東端部に、著名な大畑貝塚がある。小名浜湾沿岸

図４　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所在地	種　別	時　期
1	**添野町大町遺跡**	添野町大町	集落跡	中世
2	篠田城跡	渡辺町上釜戸字堤ノ内	城館跡	中世
3	篠小田城跡	渡辺町上釜戸字西仲田	城館跡	中世
4	表館跡	渡辺町中釜戸字表前	城館跡	中世
5	松小屋館跡	渡辺町松小屋	城館跡	中世
6	岸遺跡	渡辺町田部字岸	散布地	弥生～近代
7	深町遺跡	渡辺町田部字深町	散布地	古墳～平安
8	水走遺跡	渡辺町田部字水走	散布地	古墳～平安
9	泉･渡辺町条里制跡	泉町・渡辺町田部・洞	散布地	
10	江添遺跡	渡辺町田部字江添	散布地	古墳～平安
11	清水館跡	渡辺町田部字清水	城館跡	中世
12	清水遺跡	渡辺町田部字清水	散布地	古墳～平安
13	恵比寿館跡	渡辺町字薄作	城館跡	中世
	薄作遺跡	渡辺町字薄作	散布地	弥生
14	上山田館跡	山田町堀ノ内	城館跡	中世
15	塙遺跡	山田町塙	散布地	古墳
16	塙沢遺跡	山田町塙沢	散布地	縄文・古墳
17	余木田館跡	山田町余木田・館下	城館跡	中世
18	江畑館跡	江畑町堀ノ内	城館跡	中世
19	堀ノ内館跡	江畑町堀ノ内	城館跡	中世
20	清水遺跡	添野町清水	散布地	古墳
21	泉大平遺跡	泉町大平	散布地	縄文～平安
22	上野遺跡	山田町上野	散布地	古墳
23	沢越遺跡	山田町沢越	散布地	弥生・古墳
24	脇ノ田Ｂ遺跡	山田町脇ノ田	散布地	古墳
25	脇ノ田Ｃ遺跡	山田町脇ノ田	散布地	古～平・近
26	戸ノ内Ａ遺跡	山田町戸ノ内	散布地	古墳
27	戸ノ内Ｂ遺跡	山田町戸ノ内	散布地	古墳
28	戸ノ内Ｃ遺跡	山田町戸ノ内	散布地	古墳
29	脇ノ田Ａ遺跡	山田町脇ノ田	散布地	古墳
30	井上遺跡	山田町井上	散布地	弥生～平安
31	大林城跡	山田町大林	城館跡	中世
32	大林条里制跡	山田町大林	散布地	
33	烏内城跡	仁井田町烏内	城館跡	中世
34	辰ノ口遺跡	仁井田町辰ノ口	散布地	弥生・古墳
35	烏内横穴墓群	仁井田町烏内	古墳	古墳
36	後田遺跡	後田町源道平	散布地	弥生・古墳
37	後田古墳群	後田町源道平・月山下	古墳	古墳
38	堂ノ作遺跡	植田町堂ノ作	散布地	古墳
39	小名田遺跡	植田町小名田	散布地	古墳
40	堀ノ内遺跡	植田町堀ノ内	散布地	弥生～平安
41	館跡遺跡	植田町館跡･館崎･後田町堀ノ内	城館･散布地	古墳～中世
42	石田遺跡	植田町石田	散布地	古墳
43	八幡台遺跡	植田町八幡台・桜台	城館･散布地	縄文～中世
44	桜台遺跡	植田町桜台	散布地	縄～古・中
45	石塚館跡	石塚町宮ノ前	城館跡	中世
46	下ノ前遺跡	石塚町下ノ前	散布地	古墳
47	日渡磨崖仏	東田町日渡	石造物	中世
48	萱山遺跡	東田町萱山	散布地	古墳
49	塩野館跡	東田町	城館跡	中世
50	東田条里制跡	東田町	散布地	
51	金山窯跡群	東田町金子平	窯跡	平安
52	東台遺跡	金山町東台	散布地	縄文・弥生
53	西ノ作Ａ遺跡	小浜町西ノ作	散布地	縄文
54	西ノ作Ｂ遺跡	小浜町西ノ作	散布地	縄・奈・平
55	小原遺跡	岩間町小原	散布地	縄文～古墳
56	八幡台古墳	植田町字八幡台	古墳	古墳
57	館山横穴墓群	植田町字館山	古墳	古墳
58	館崎横穴墓群	植田町字館崎	古墳	古墳
59	岩間横穴墓群	岩間町	古墳	古墳
60	川崎遺跡	佐糠町川崎	散布地	古墳
61	輪山遺跡	岩間町輪山	散布地	旧石器～古墳
62	輪山館跡	岩間町輪山	城館跡	中世
63	天神林古墳	岩間町塚原	古墳	古墳
64	竹ノ花遺跡	岩間町竹ノ花	散布地	縄文～古墳
65	西小原遺跡	小浜町西小原	散布地	縄文～古墳
66	台遺跡	小浜町台	散布地	縄文～古墳
67	渚遺跡	小浜町渚	散布地	弥生～古墳
68	石畑遺跡	沼部町石畑	散布地	古墳・近世
69	細谷横穴墓群	錦町字細谷	古墳	古墳
70	細谷遺跡	錦町細谷	散布地	弥生～古墳
71	鬼越城跡	錦町鈴鹿	城館跡	中世
72	鬼越下横穴群	錦町鬼越下	古墳	古墳
73	東照廃寺跡	錦町鬼越下	社寺跡	近世
74	江栗Ａ遺跡	錦町江栗	散布地	古墳
75	江栗Ｂ遺跡	錦町江栗	散布地	古墳
76	鳥居西遺跡	錦町鳥居西	散布地	古代
77	御宝殿遺跡	錦町御宝殿	散布地	古代
78	御宝殿古墳	錦町御宝殿	古墳	古墳

はいわき市でも特に貝塚が集中する地域であり、さらに寺脇貝塚、綱取貝塚など全国的に知られた貝塚が分布している。なお、小名浜湾に注ぐ藤原川の水系域では、比較的内陸部にまで貝塚の分布が認められるが、鮫川水系域では貝塚を含む縄文時代の遺跡が少ない。

弥生時代では、鮫川の本流域に沿って遺跡が散見され、稲作文化の受容と沖積低地の関係が見て取れる。しかし、勿来低地は氾濫原的な性格が強いためか、江畑丘陵・金山台地など勿来低地を見下ろす高台に弥生時代の集落跡が立地している。輪山遺跡(61)、八幡台遺跡(43)は、後期弥生土器の基準資料遺跡である。辰ノ口遺跡(34)では、十王台式期の弥生土器が確認されている。

古墳時代に入ると遺跡数が増加し、勿来低地を中心とする土地開発が進行したものと見られる。勿来地区の古墳は、後期のものが主体である。後田古墳群(37)の１号墳から出土した脚付陶棺は、東北地方で唯一のものである。いわき市は横穴墓が多い地域として有名であるが、鮫川本流域においても館山横穴墓群(57)、館崎横穴墓群(58)が知られている。館山横穴墓群６号墓の奥壁に

は、馬、渦文が線刻されていた。

奈良時代の養老二年(718年)、常陸国から分離した菊多郡を加えて石城国が新建された。しかし、石城国は10年以内に陸奥国に再編入され、以後、菊多郡は陸奥国の玄関口となる。館跡遺跡(41)では奈良時代の、八幡台遺跡(43)・西ノ作Ｂ遺跡(54)では奈良～平安時代の集落跡が確認されている。律令期の土地制度に条里制があるが、いわき市では、国土調査図、地籍図等を利用して、悉皆的な条里制跡の分布調査が行われている。しかし、鮫川流域では、勿来低地の氾濫原的な影響もあってか、他地域よりも条里制跡が少ないようである。鮫川左岸域では大林条里制跡(32)がある。平安時代の生産遺跡としては、円面硯、杯、甕等が出土した金山窯跡群(51)があった。

中世に入ると、これまで遺跡があまり認められなかった江畑丘陵の内陸部にも城跡館の分布が確認できる。烏内城跡(33)は単郭式で空堀がコ状に巡り、土塁も認められる。勿来低地沿いの舌状台地に近接して立地する複合遺跡の館跡遺跡(41)・八幡台遺跡(43)は、いずれも４つの曲輪で構成される連郭式の城館跡でもある。館跡遺跡で確認された城館跡は、中世文書に記されている「上田城」の有力比定地とされている。

第４節　調 査 経 過

添野町大町遺跡の調査期間は、令和４年５月９日(月)～５月31日(火)である。なお、令和４年６月７日(火)に、いわき建設事務所、県教育庁文化財課、当遺跡調査部の関係職員で調査終了状況を確認し、引渡しを行った。

各週の調査経過は以下のとおりである。

５月９日～13日　９日に現地入りし、調査対象箇所(以下、調査区とする。)の縄張りを行った。10日、バックホーによる表土掘削作業を、調査区西部から開始した。11日から作業員が入り、遺構検出作業に着手した。同日、調査区内に測量基準杭・ベンチマークを設定した。12日、調査区南東部で１号・３号溝跡の一部を検出した。同日、バックホーによる表土掘削・排土運搬作業が終了した。13日は、雨天のため作業を中止した。

５月16日～20日　16日、雨天のため作業を中止した。17日、午前中は排水作業と泥土除去作業を行った。午後から遺構検出作業を再開した。18日、１～３号溝跡、１号・２号土坑、小穴を検出した。19日、１～３号溝跡の掘削作業を開始した。20日、１～３号溝跡の掘削作業を継続した。

５月23日～27日　23日、前日の雨の影響による調査区内の排水作業と汚れた検出遺構の清掃に終始した。24日、１～３号溝跡、１号・２号土坑、小穴(Ｐ１～６)の断面・平面記録を行った。また、３号溝跡の平面記録を行った。25日、１号溝跡、１号・２号土坑の平面記録を行った。また、小穴(Ｐ７～15)を検出し、半截した。26

日の午前中に２号溝跡とＰ７～15の平面記録等が終わり、検出遺構すべての調査が終了した。同日午後、調査区内の清掃を行い、調査区全景・遺構集中地点等の写真撮影を行った。27日は、雨天のため作業を中止した。

５月30日・31日　30日、調査区の地形測量図を作成した。31日、調査区からの撤収作業等を行い、添野町大町遺跡の発掘調査が終了した。

第５節　調 査 方 法

表土掘削作業は、効率化を図るため、バケットに平爪を装着したバックホー（0.45㎥）を使用して行った。また、表土掘削作業で生じた土砂についてもバックホー（0.45㎥）で運搬作業を行い、調査区南側の指定された排土置場に搬送した。

遺構検出・掘削作業は、原則として人力で行った。遺構掘削は、２分割法等で常に土層観察を行いながら実施した。検出状態又は重複関係が不明瞭な遺構については、検出段階で先に最小限の断割りを行い、その土層断面を観察しながら掘削を行った。また、各遺構の完掘後は、断割りによる底面、壁等の最終確認を行った。

今回の調査対象範囲、遺構等の位置を正確に示すため、調査区を公共座標Ⅸ系X=104,570、Y=86,590を基点とする10ｍ四方のグリッドで網羅した。各グリッドの名称は、基点から南方向へＡ・Ｂのアルファベットを、また東方向へ１～４の算用数字を付け、その組み合わせによってＡ１～Ｂ４と表記した。

調査区内に各グリッドの位置・範囲を示すため、測量基準杭を兼ねた木杭を、測距測角儀を用いて打設した。また、調査区内に標高を示すベンチマークを設置し、水準測量用の基準点とした。

基本土層の表記は、大文字Ｌとローマ数字の組み合わせを基本とし、さらに細分した土層についてはアルファベットを付加して、ＬＩａのように表した。遺構内堆積土については、小文字ℓと算用数字でℓ１・ℓ２…のように表記した。

遺構番号は、発見順で１号溝跡・２号溝跡…のように通し番号を付けた。また、便宜上、用例に示した略記号と算用数字を組み合わせてＳＤ01・ＳＤ02…のようにも表記した。

遺構の実測は、平面・断面のセットを原則とした。遺構実測図は、1/10・1/20の縮尺で作成した。遺構の平面実測は、簡易遣り方測量又は測距測角儀を使用して行った。地形測量図は、等高線を25㎝単位とし、1/100の縮尺で作成した。

写真記録は、デジタル１眼レフカメラ、デジタルコンパクトカメラの２機種を使用して撮影を行った。

発掘調査で得られた各種記録・出土遺物は、公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部で整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

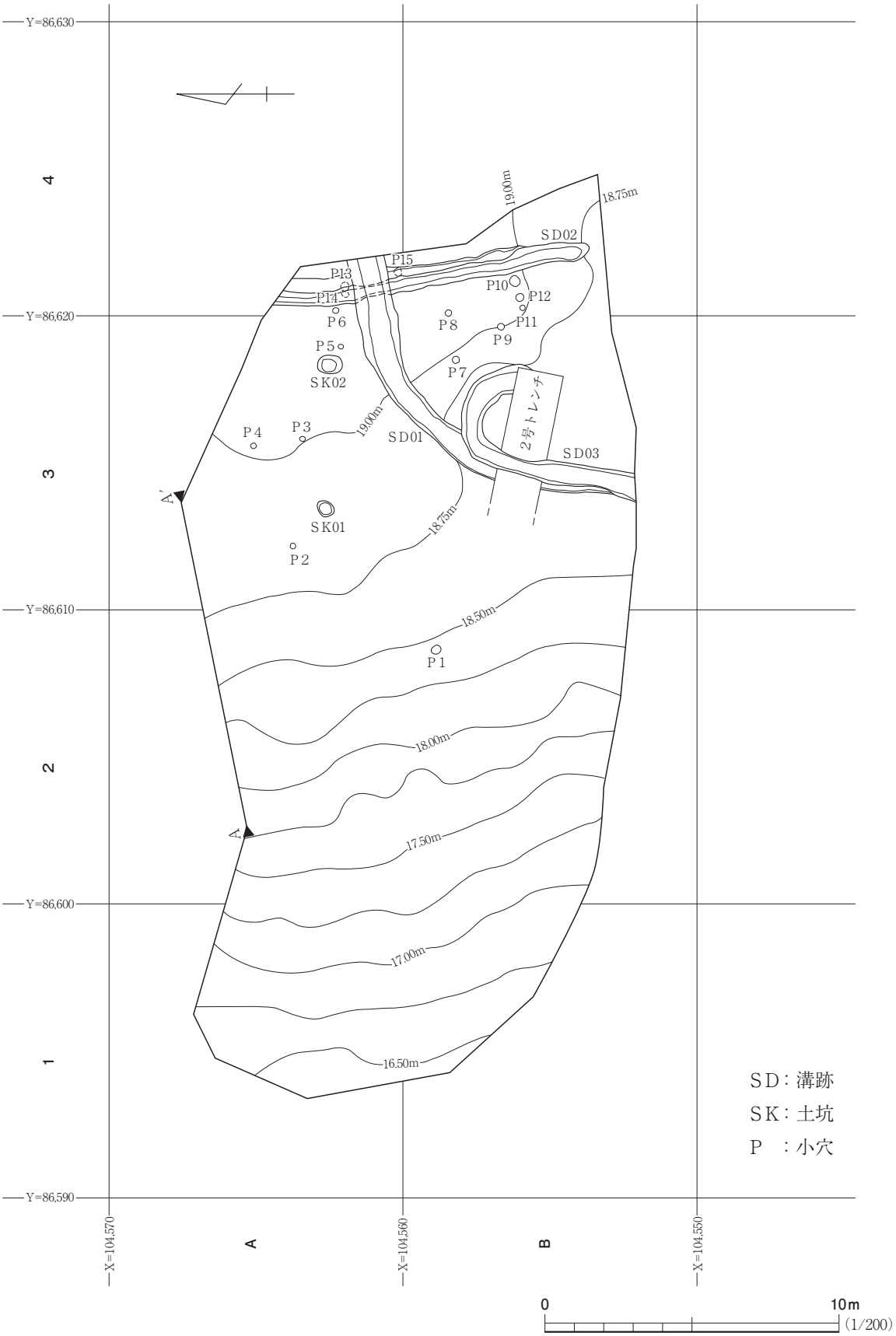

Y=86,630
Y=86,620
Y=86,610
Y=86,600
Y=86,590
X=104,570
X=104,560
X=104,550
A
B
1
2
3
4
19.00m
18.75m
18.50m
18.00m
17.50m
17.00m
16.50m
SD02
SD01
SD03
SK01
SK02
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
2号トレンチ
A
A'
SD：溝跡
SK：土坑
P　：小穴
0
10m
(1/200)

図５　遺構配置

第２章　調 査 成 果

第１節　遺 構 の 分 布（図５）

調査の結果、溝跡３条、土坑２基、小穴15個を検出した。遺構検出面はすべてＬⅡ上面である。各遺構の時期はいずれも不明であるが、令和３年度の試掘・確認調査で指摘されているように中世頃の可能性がある。

調査区の地形は、西に張り出す丘陵頂部の平坦地で、傾斜度は中央～西部が８°未満、東部がほぼ水平である。調査区の南～西側は崖になっている。検出遺構は、調査区東部に集中しており、わずかにＰ１が調査区中央部に位置している。１～３号溝跡は重複関係にあり、２号溝跡が最も古く、３号溝跡が最も新しい。１号溝跡東端・２号溝跡北端の状況から、両溝跡はさらに調査区外へ延びている可能性が高いと考えられる。しかし、３号溝跡は、崖のため南端部で途切れている。

Ｐ１～15は、いずれも比較的浅い小穴である。小穴の分布状況から、建物跡等を確認することはできなかった。しかし、Ｐ13～15については、堆積土の状況から柱穴であった可能性がある。

第２節　基 本 土 層（図６、写真５）

調査区の基本土層は、ＬＩ・ＬⅡに分けた。ＬＩを表土、ＬⅡを地山とした。令和３年度の試掘・確認調査では、黒褐色の旧表土が確認されている。しかし、今回の調査区において旧表土とされた土層は認められず、表土直下が地山となる。なお、基本土層の状況から、削平など大きな地形改変の痕跡は認められなかった。

ＬＩを、さらにＬＩａ・ＬＩｂに分けた。ＬＩａは、表層の腐食土である。ＬＩｂは、比較的腐食に乏しい粘性土壌である。ＬⅡは黄褐色系の土壌である。ＬⅡの分布は、Ａ２・Ａ３グリッド付近に限られ、他の箇所では、ＬＩ直下が砂礫を多量に含む黄褐色土壌（10YR5/6）となる。

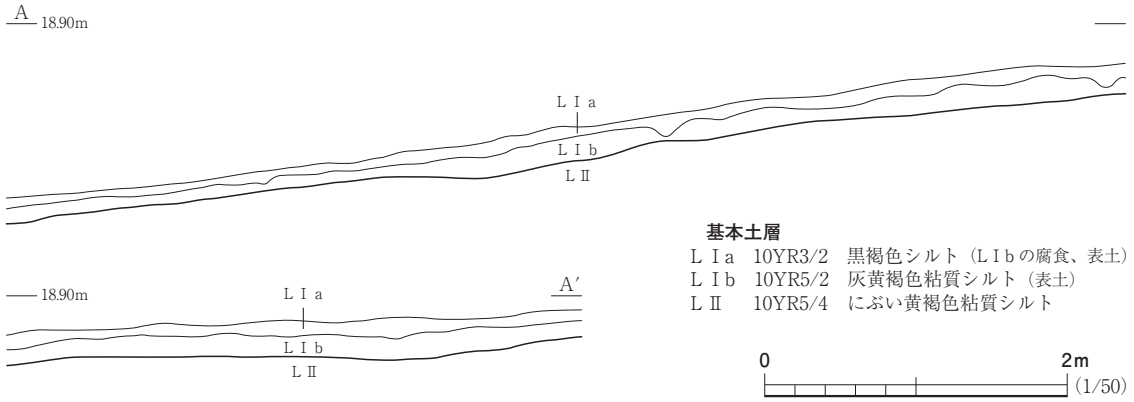


図６　基本土層

第３節　　溝　　跡

１号溝跡　ＳＤ01

遺構・遺物（図７、写真６～８・23）

１号溝跡は、Ｂ３グリッドの南部からＡ４グリッド方向へ弧状に延びている。２号・３号溝跡と重複するが、２号溝跡よりも新しく、３号溝跡よりも古い。

遺構内堆積土はℓ１の１層で、自然堆積土と判断した。１号溝跡の断面形は概ね舟底状を呈するが、壁の立ち上がりは直線的である。１号溝跡の上端幅は、最大で135㎝を測る。遺構検出面から底面までの深さは、北部～中央部が約20㎝、３号溝跡と重複する南部が約６㎝である。なお、ℓ１から糸切り痕が残る陶器の底部破片（図７－１）が出土したが、細片のため詳細は不明である。

１号溝跡の性格・時期については、明らかにすることができなかった。

２号溝跡　ＳＤ02

遺　　構（図７、写真９・11）

２号溝跡はＡ４・Ｂ４グリッドに位置し、南北方向へ直線的に延びている。２号溝跡は、１号溝跡・Ｐ13～15と重複するが、１号溝跡よりも古く、Ｐ13～15よりも新しい。なお、２号溝跡の掘り込みが１号溝跡よりも深く、重複する１号溝跡の底面下に２号溝跡が遺存していた。

遺構内堆積土は、断面形状に段差が認められたものの細分ができず、ℓ１の１層とした。２号溝跡は、構築当初から上下２段であったと考えられる。なお、ℓ１は自然堆積土と判断した。

２号溝跡下段の断面形は、舟底状を呈する。２号溝跡の上端幅は最大で105㎝を測るが、南部では段差が消失しその上端幅は約60㎝となる。遺構検出面から底面までの深さは、下段が20～25㎝、上段が５㎝前後である。なお、遺物は確認できなかった。

２号溝跡の性格・時期については、明らかにすることができなかった。

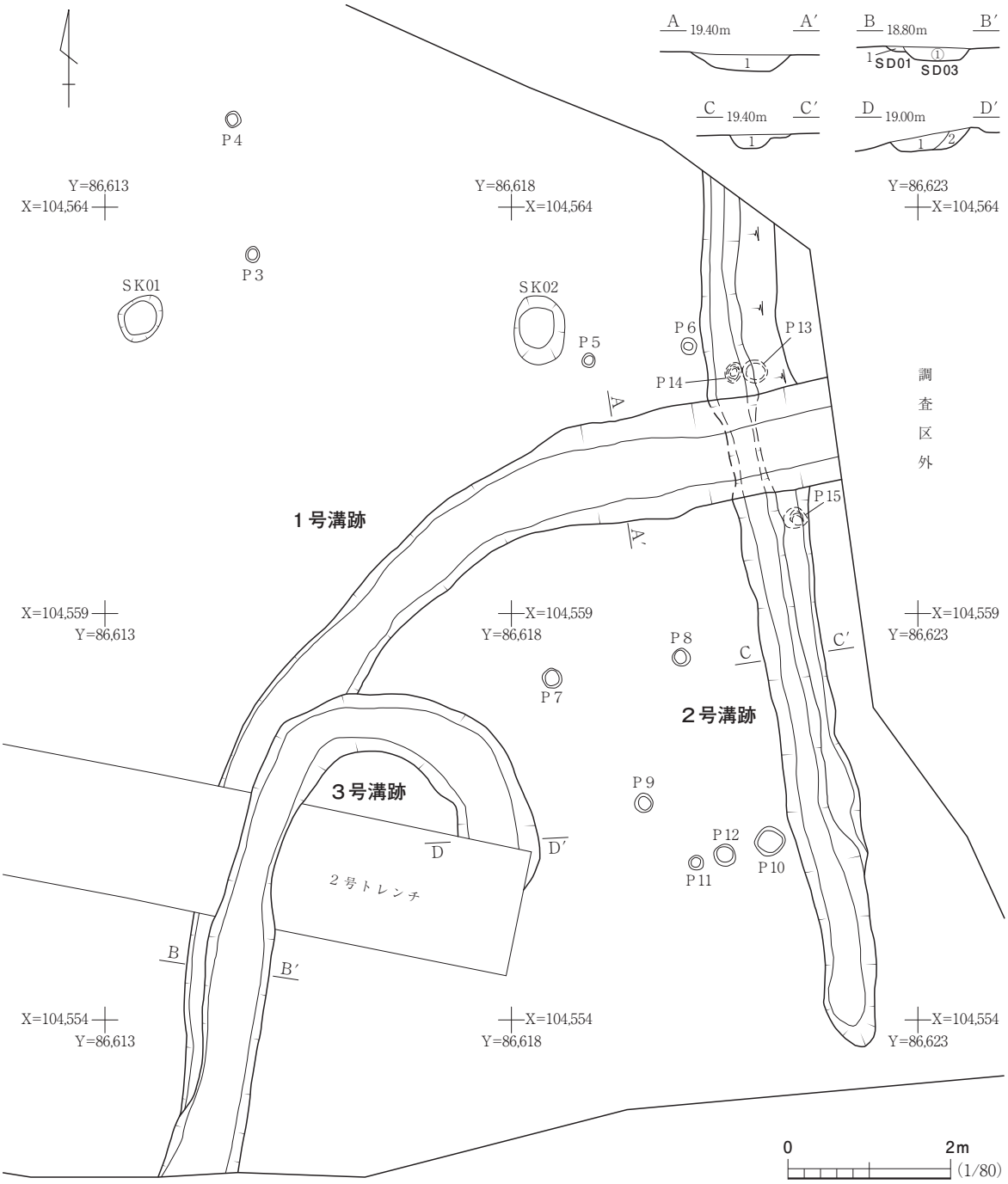
３号溝跡　ＳＤ03

遺構・遺物（図７、写真８・10・12・23）

３号溝跡は、令和３年度の試掘・確認調査の２号トレンチで発見された遺構である。３号溝跡の北部が∩状に転回するが、撹乱によりその先端を消失している。３号溝跡の位置はＢ３グリッドである。１号溝跡と重複するが、３号溝跡の方が新しい。

遺構内堆積土はℓ１・ℓ２の２層に分け、いずれも自然堆積土と判断した。３号溝跡の断面形は舟底状を呈する。３号溝跡の上端幅は80㎝前後である。遺構検出面から底面までの深さは約20㎝である。なお、ℓ１から外面が褐色を呈する焼締めの陶器片（図７－２）が出土している。

３号溝跡の性格・時期については、明らかにすることができなかった。



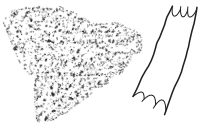
１号溝跡堆積土（A-A′）
1　灰黄褐色粘質シルト　10YR5/2（しまり強）

１号・３号溝跡堆積土（B-B′）
1　暗灰黄色粘質シルト　2.5Y4/2（粘性強、しまりやや強）
①　暗褐色シルト　10YR3/3（粘性やや強、しまり弱）

２号溝跡堆積土（C-C′）
1　灰黄褐色粘質シルト　10YR5/2

３号溝跡堆積土（D-D′）
1　暗褐色シルト　10YR3/4（粘性やや強、しまり弱）
2　暗灰黄色粘質シルト　2.5Y5/2（粘性強、しまり弱）

1（SD01 ℓ1）



2（SD03 ℓ1）

0　5cm
(1/2)

図７　１～３号溝跡・出土遺物

第４節　その他の遺構

１号土坑　ＳＫ01

遺　　構（図８、写真13・14）

１号土坑は、令和３年度の試掘・確認調査で発見された遺構で、遺構内堆積土から鉄滓（写真23）が１点出土している。１号土坑の位置はＡ３グリッドである。重複する遺構はない。

遺構内堆積土はℓ１の１層とした。ℓ１の観察から、人為堆積土のような痕跡は確認できなかった。１号土坑の断面形は、ほぼ水平の底面から壁が急角度で立ち上がる。遺構検出面から底面までの深さは22㎝である。１号土坑の平面形は円形に近く、その上端の東西幅は55㎝である。

１号土坑の性格は不明である。時期は、鉄滓が出土したことから中世頃の可能性もある。

２号土坑　ＳＫ02

遺　　構（図８）

２号土坑の位置はＡ３グリッドである。２号土坑と重複する遺構はない。遺構内堆積土はℓ１の１層で、自然堆積土と判断した。２号土坑の断面形は皿状で、遺構検出面から底面中央までの深さは12㎝である。１号土坑の平面形は楕円形で、その上端規模は東西62㎝×南北84㎝である。

１号土坑から遺物は確認できず、性格・時期ともに不明である。

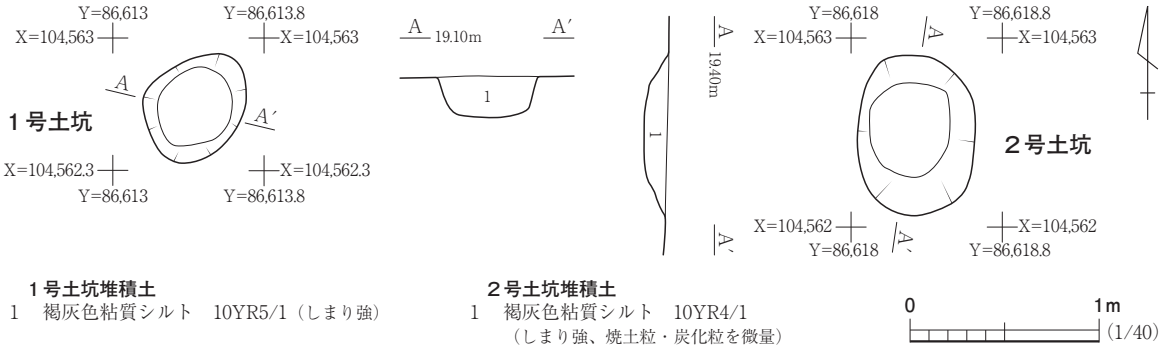


図８　１号・２号土坑

小　　穴　Ｐ１～15

遺　　構（図９、写真15～22）

調査区において計15個の小穴Ｐ１～15を検出した。Ｐ２は、令和３年度の試掘・確認調査で発見された小穴である。小穴の分布は、調査区東端部に集中している。小穴の深さは約半数が20㎝未満である。小穴の平面形はすべて円形である。小穴の各位置から、掘立柱建物跡・柱列等を見出すことはできなかった。しかし、Ｐ13～15については柱痕と考えられる堆積土が確認され、掘立柱建物等の柱穴の可能性がある。なお、Ｐ13～15は２号溝跡と重複するが、Ｐ13～15の方が古い。

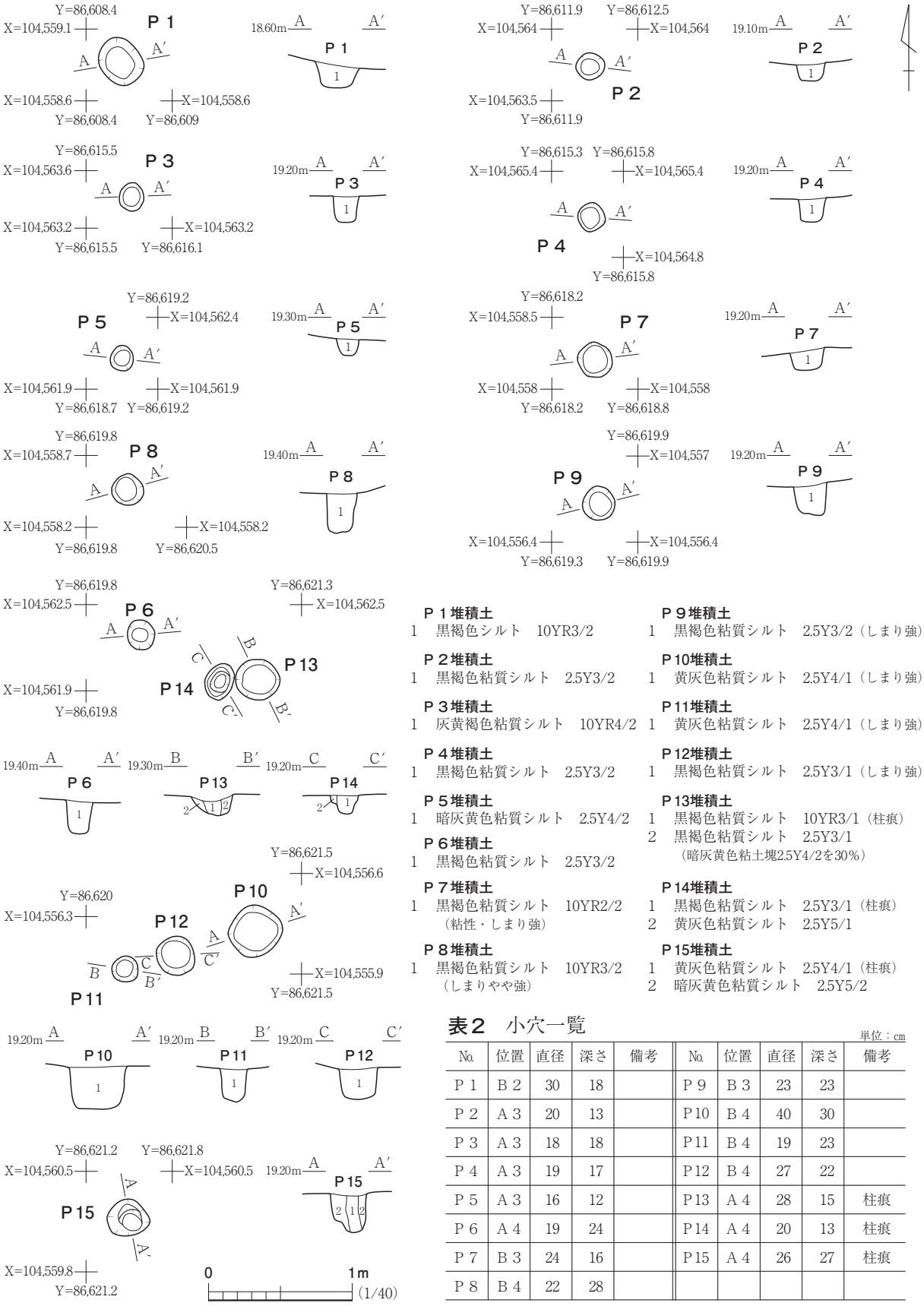


図９　小穴

Ｐ１堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2

Ｐ２堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2

Ｐ３堆積土
1　灰黄褐色粘質シルト　10YR4/2

Ｐ４堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2

Ｐ５堆積土
1　暗灰黄色粘質シルト　2.5Y4/2

Ｐ６堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2

Ｐ７堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR2/2
（粘性・しまり強）

Ｐ８堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/2
（しまりやや強）

Ｐ９堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/2（しまり強）

Ｐ10堆積土
1　黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1（しまり強）

Ｐ11堆積土
1　黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1（しまり強）

Ｐ12堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（しまり強）

Ｐ13堆積土
1　黒褐色粘質シルト　10YR3/1（柱痕）
2　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1
（暗灰黄色粘土塊2.5Y4/2を30％）

Ｐ14堆積土
1　黒褐色粘質シルト　2.5Y3/1（柱痕）
2　黄灰色粘質シルト　2.5Y5/1

Ｐ15堆積土
1　黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1（柱痕）
2　暗灰黄色粘質シルト　2.5Y5/2

表２　小穴一覧

単位：cm

No.	位置	直径	深さ	備考	No.	位置	直径	深さ	備考
Ｐ１	Ｂ２	30	18		Ｐ９	Ｂ３	23	23	
Ｐ２	Ａ３	20	13		Ｐ10	Ｂ４	40	30	
Ｐ３	Ａ３	18	18		Ｐ11	Ｂ４	19	23	
Ｐ４	Ａ３	19	17		Ｐ12	Ｂ４	27	22	
Ｐ５	Ａ３	16	12		Ｐ13	Ａ４	28	15	柱痕
Ｐ６	Ａ４	19	24		Ｐ14	Ａ４	20	13	柱痕
Ｐ７	Ｂ３	24	16		Ｐ15	Ａ４	26	27	柱痕
Ｐ８	Ｂ４	22	28						

第３章　ま　と　め

小名浜道路整備事業に伴う添野町大町遺跡の発掘調査を、令和４年５月９日（月）～５月31日（火）の期間で行った。調査実施面積は350㎡である。調査対象となった箇所は、添野町大町遺跡の西端部で、舌状に張り出す丘陵の突端部である。添野町大町遺跡の北側を旧陸前浜街道が通じており、遺跡周辺は古来より交通要衝の一角であった可能性がある。

検出した遺構は、溝跡、土坑、小穴であるが、性格・時期が明確に判明した遺構はない。しかし、調査区東端部で検出した小穴の中には柱穴と考えられるものも含まれており、調査区の東側に掘立柱建物跡等の遺構が存在している可能性がある。

出土した遺物は少量で、時期が明確に分かるものはない。なお、令和３年度の試掘・確認調査では中世末頃と推測されるかわらけ（図10－１）が出土しており、この資料が添野町大町遺跡の年代を考える上で参考となる。

添野町大町遺跡の立地は江畑丘陵であるが、同丘陵では古代以前の遺跡が極めて少ない。しかし、中世に入ると城館跡が増え、添野町大町遺跡の半径３㎞内には、８か所以上の城館跡が分布している。添野町大町遺跡の南西約2.5㎞の地点に位置する館跡遺跡は、昭和51年度に発掘調査が行われた連郭式の城館跡で、「上田城」の有力比定地と考えられている。上田城は、書状から15世紀中頃は岩城氏の拠点であり、また、16世紀末には佐竹氏の一門が常駐していたようである。

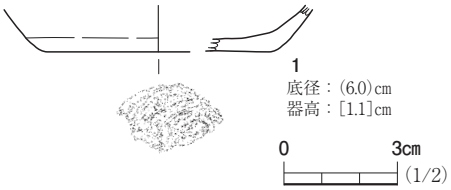


図10　かわらけ

今回の調査範囲が極めて限られていたこともあり、添野町大町遺跡の全容は不明とせざるを得ない。しかし、上田城のような15～16世紀の戦国時代の緊張関係の中に、添野町大町遺跡や周辺の城館跡も取り込まれていたと考えることも可能であろう。

参考文献

馬目順一 他　1980 『八幡台遺跡』（いわき市埋蔵文化財調査報告　第５冊）いわき市教育文化事業団
伊藤信雄・小林清治 監修　1986 『いわき市史第１巻　原始・古代・中世』いわき市
伊藤信雄・小林清治 監修　1986 『いわき市史第８巻　原始・古代・中世資料』いわき市
中山雅弘 他　1988 「浜通り地区の中世城館跡」『福島県の中世城館跡』（福島県調査報告書第197集）福島県教育委員会

写　真　図　版

1　調査区全景（南から）

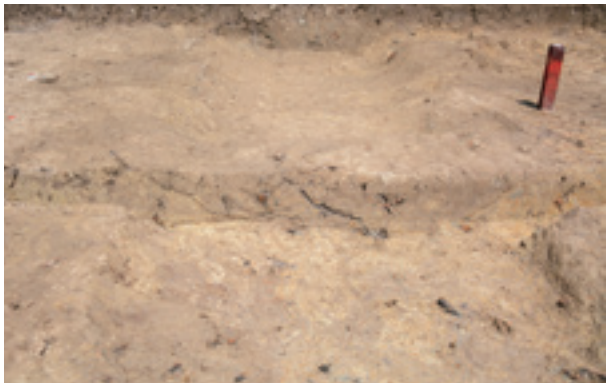
2　調査区東部（南東から）

3　調査区東部（北西から）

4　作業風景（南西から）

5　基本土層断面（南から）

6　１号溝跡全景（北東から）



7　１号溝跡断面（西から）

8　１号・３号溝跡断面（南から）

9　２号溝跡全景（南から）

10　３号溝跡全景（北西から）

11　２号溝跡断面（南から）

12　３号溝跡断面（南から）

13　１号土坑全景（北から）

14　１号土坑断面（北から）

15　Ｐ２断面（南から）

16　Ｐ４断面（南から）

17　Ｐ７断面（南から）

18　Ｐ９断面（南から）

19　Ｐ12断面（南から）

20　Ｐ13断面（西から）

21　Ｐ14断面（西から）

22　Ｐ15断面（西から）

23　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	おなはまどうろせいびじぎょういせきはっくつちょうさほうこく
書名	小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告
副書名	添野町大町遺跡
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第556集
編著者名	香川愼一
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部調査課 〒960－8115　福島県福島市山下町１－25　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2022年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そえのまちおおまち 添野町大町 いせき 遺跡	ふくしまけん　し 福島県いわき市 そえのまちおおまち 添野町大町	07204	1485	36°56′18″	140°48′20″	20220509 ～ 20220531	350㎡	道路整備（小名浜道路）に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
添野町大町遺跡	集落跡	中世	土坑 溝跡 小穴	２基 ３条 15個	陶器	掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴を確認した。

要約	添野町大町遺跡の周囲に中世の城館跡が分布していることから、今回の調査で確認した掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴についても、城館跡に関連した遺構の可能性がある。

※経緯度数値は世界測地系（平成14年４月１日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第 556 集

小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告

添野町大町遺跡

令和 4 年 11 月 30 日発行

編　集	公益財団法人福島県文化振興財団	遺跡調査部	（〒 960 － 8115）福島市山下町 1 － 25
発　行	福島県教育委員会		（〒 960 － 8688）福島市杉妻町 2 － 16
	公益財団法人福島県文化振興財団		（〒 960 － 8116）福島市春日町 5 － 54
	福 島 県 土 木 部		（〒 960 － 8670）福島市杉妻町 2 － 16
印　刷	八幡印刷株式会社		（〒 970 － 8026）いわき市平字田町 82 － 13